

『米中開戦前夜』というタイトルの本が出た時、これも米中の対立を煽る本の一つにすぎないという程度の認識しかなく、敢えて読んでみようという気持ちにはならなかった。本を手取ることもなく、数年が過ぎたある日、著者のグレアム・アリソンがこの本の中で、「トウキディデスの罠」ということばを用いて、米中開戦の確率は七十五%だと言っているという文章を目にした。地理的に米中両国の間に住んでいる日本人としては、もし戦場になったらと考えると心穏やかではなかった。

実は、このことばを用いた文章を目にしたというのは、二〇二〇年春の大学入試の問題文においてである。教授と学生のぎこちない会話が延々と続き、読んでいるそばからうんざりしてきた。その文章を読んだ記憶も薄れてきた今年、『學士會會報』の中で、再び「トウキディデスの罠」ということばに出会った。

トウキディデスがアテネに生きていた時代の中国は、春秋から戦国時代に替わるころ。アメリカ合衆国はもちろん誕生していない。コロンブスの登場もまだ一九〇〇年も先のことだ。わが日本は縄文時代の末期。そういう時代に彼は、「アテネの台頭に対してスパルタが抱いた不安が、戦争を不可避にした要因である」と分析したのである。

そして、アリソンの研究チームは過去五〇〇年間に新興国が覇権国を脅かした事例を十六件あげて、そのうち十二件は戦争に発展したと考えた。だから、米中の対立は七十五%の確率で戦争に発展すると述べているのである。アメリカと中国をギリシアの例に例えると、アメリカが覇権国スパルタで、中国が新興国アテネである。二十世紀はアメリカの時代であった。そこにGDP世界第二位の中国が、中国共産党成立百周年までには、中華人民共和国成立百周年までには、と相次いで世界制覇を目指す達成目標を掲げてきたので、アメリカの圧倒的優位が脅かされているのである。

少しでも戦争回避の可能性を見つけて、共存共栄の世界にしたいものである。